

大和王権はどこから来たか？



纏向遺跡



箸墓古墳

植松基員

ヤマト王権成立 キーワード

- 崇神天皇（10代）～仲哀天皇（14代）と応神天皇（15代）～雄略天皇（21代）
- 豪族（政権の中核）の興亡
- 鉄の道、水銀朱ラッシュ
- 銅鏡
- 大陸の世界情勢
- 三輪山祭祀、伊勢神宮
- シャーマン
- 地方平定
- 前方後円墳
- 卑弥呼と纏向遺跡

西暦	57	107	180	頃	239	247	258	369	400	頃	413	430	477	480	507	528	552				
歴代								10	11	12	13	14	神功皇 后	15	16	21	26	29			
天皇名							崇神	垂仁	景行	成務	仲哀		后	応神	仁徳	雄略		繼体	欽明		
中国文献														讚	珍	武					
出来事	倭奴国王後漢に朝貢・金印	倭国王・帥升後漢に朝貢	倭国大乱		卑弥呼魏に使い「親魏倭王」	邪馬台国と狗奴国戦乱	崇神天皇崩御	遺跡	の物語。四將軍遠征。纏向	革。伊勢神宮の誕生。日本武尊	混乱期？大神神社祭祀様式の変	七支刀百濟より送られる	混乱期続く？	倭国新羅出兵し、敗北。好太王碑	九州より畿内進出。晋に使者	宋に使者を送る	宋に使者を送る	雄略天皇崩御 混乱が始まる	繼体天皇即位	磐井の乱	仏教公伝
中国	後漢			三国志時代			西晋、五胡十六国				南北朝（宋、北魏）										
韓半島	楽浪郡、帯方郡		公孫	高句麗、新羅、百濟																	

赤字は中国書物

青地は日本書物

黒字は推定

天皇諡号

歴代	漢号諡号	和風諡号
1	神武天皇	カムヤマトイワレヒコ
10	崇神天皇	ミマキイリヒコイニエ
11	垂仁天皇	イクメイリヒコイサチ
14	仲哀天皇	タラシナカツヒコ
15	応神天皇 * 1	ホムタワケ
16	仁徳天皇	オホサザキ
15	履中天皇	イザホワケ
21	雄略天皇	オオハツセワカタケル
26	継体天皇 * 2	オホドノオオキミ

* 1 井上光貞、吉村武彦 説

* 2 直木孝次郎 説

日本書紀と古事記

日本書紀

- 681年、天武期に編纂開始。720年完成（と、続日本紀に記載）
- 帝紀、旧辞、墓記（豪族の古伝）、三国志等の大陸文献をもとに編纂
- 編集は天武天皇の親王。完成時は舎人親王（親藤原派）
- 執筆は渡来人が多く担当か？

古事記

- 712年に完成（と序文に記載） But ①13世紀に世に出るまで、ほとんど知られていなかった、②続日本紀に記載が無い、③平安期に他書で言及が無い、④序文には奈良時代に使われていなかった万葉仮名が使用等、偽物説がある。
- 序文は12, 3世紀に後で付けられたものとの通説
- 太安万侶の实在が確認された。

豪族とは (1)

皇族：大王の親族（皇族を形成）

豪族：血縁、非血縁を通して共同体（氏族）を形成

豪族 { 畿内豪族（大和、河内、摂津、山背）
地方豪族 その他

①姓（カバネ）：出自、職能による呼び名。6世紀前半に大王（継体、欽明朝）が付与

✓ 出自：地域を治める一族で、臣、君など。

・ 臣：中央政権に近い存在（王権に対して融和的もしくは王権そのもの）

④ 葛城臣、蘇我臣、和邇臣。平群臣 ⑤ 吉備臣、出雲臣

・ 君：中央政権に遠い（王権に対して、対峙的）

息長君、筑紫君、肥君、三輪君、鴨君

豪族とは (2)

✓職能： 軍事、祭祀、文書管理等の職能に従った姓で、王権を構成する一族もしくはは官僚組織

連 > 直 (あたい) > 首 (おびと) > 造 (みやつこ) > > 史 (ふひと) 他

- ・ 物部連、中臣連、大伴連、倭直、倭漢直、秦造 等
- ・ 尾張連 (地名を持ちながら、臣でも君でもない。特殊例：所説あり)

②部：有力中央豪族が地方に持つ私有地、組織。

大伴部、物部、中臣部、蘇我部 等。徴税、徴兵等の源泉

③記紀での表現：

- ・ 連は神話に紐づけ

大伴氏：天孫降臨神話に、大伴連の祖のXXが高天原から降りたとある

物部氏：饒速日命、神武天皇より先に大和に進出

- ・ 臣、君は必ずしも神話への紐づけ無し、むしろ、古代天皇に紐付 (天皇家との血縁を謳う) : 和邇臣は五代天皇の皇子の子孫等

出雲臣

XX家は出自

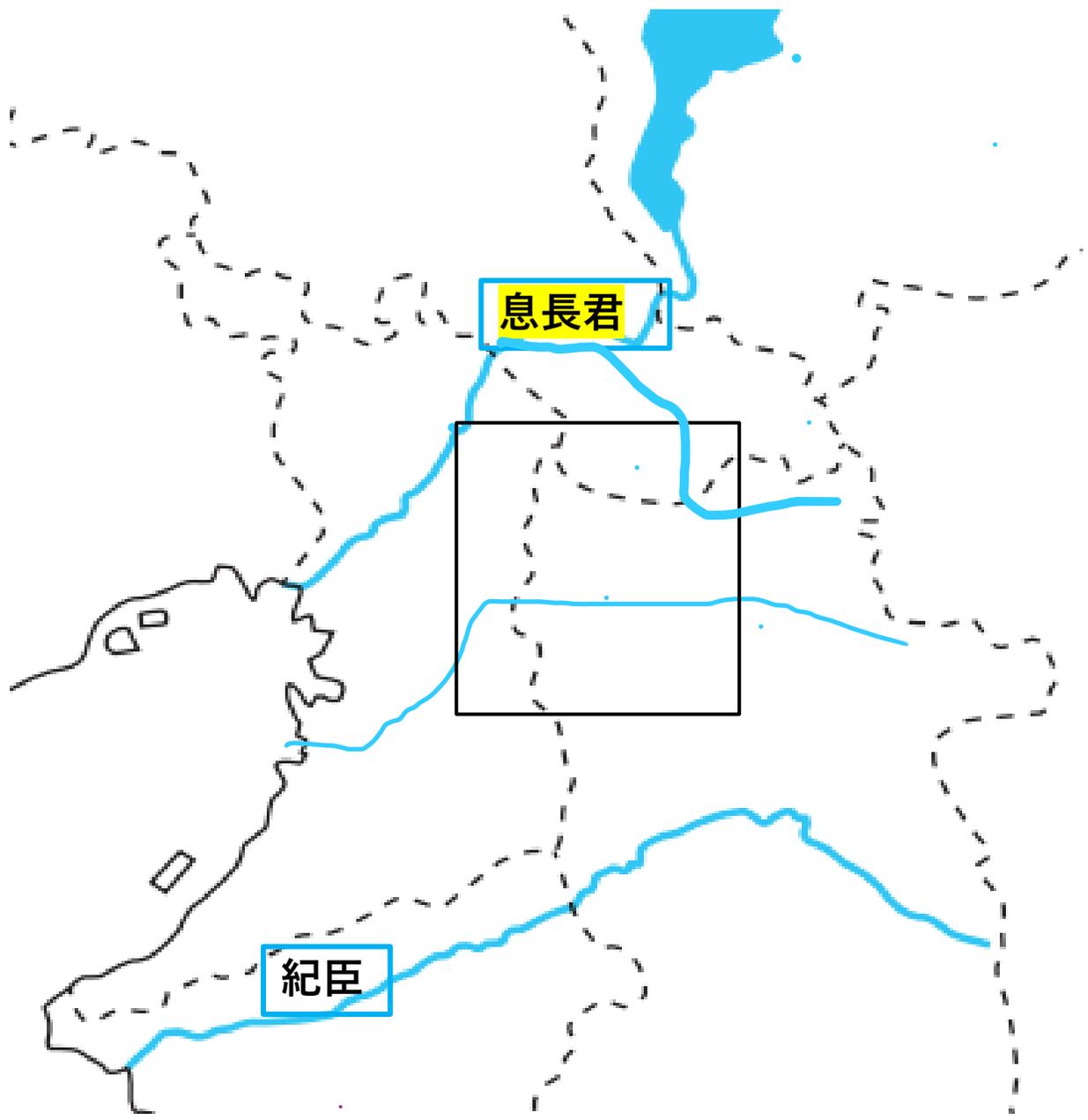
XX家は職能（連）

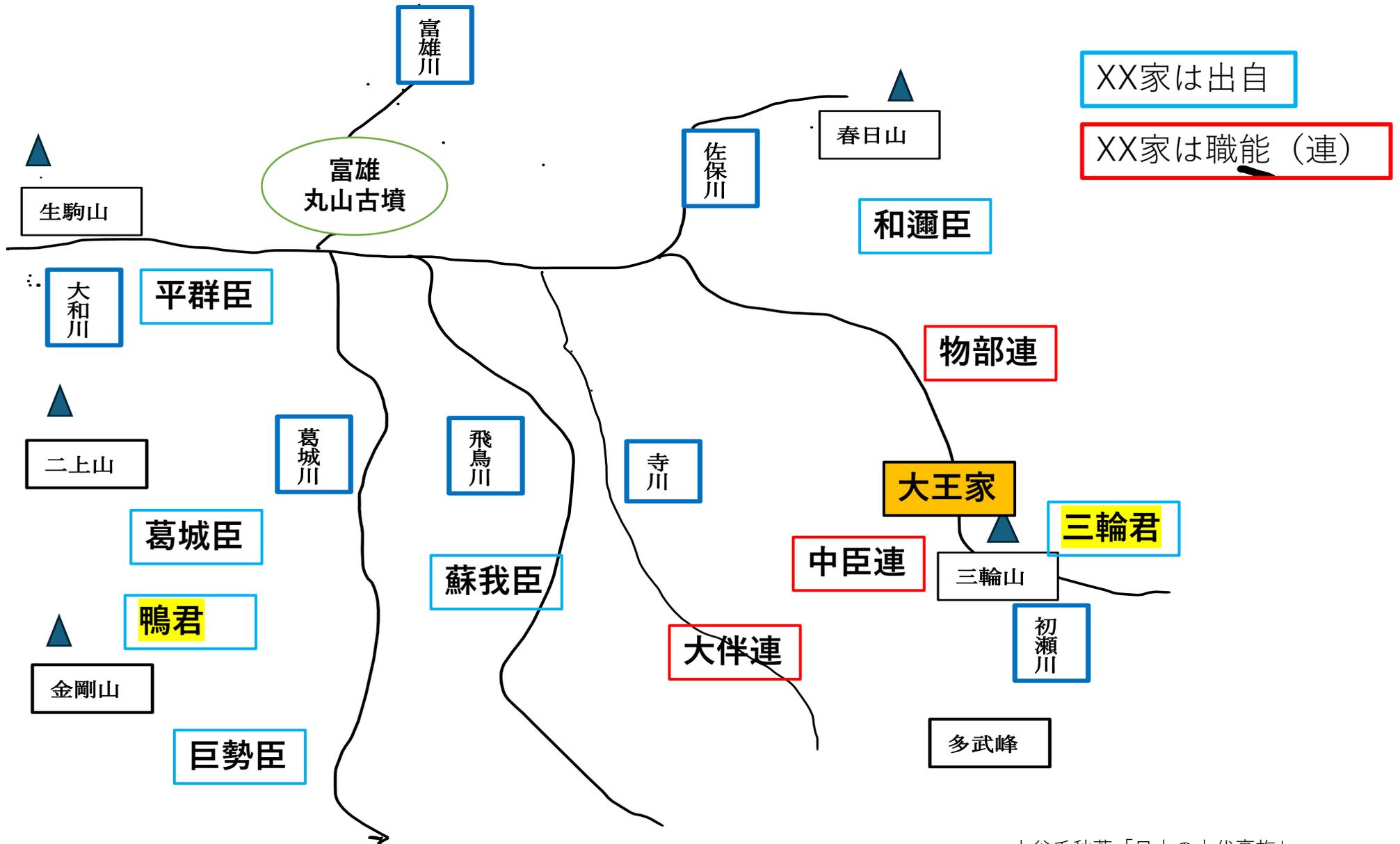
尾張連

吉備臣

息長君

紀臣





豪族とは（3）：豪族の興亡

- 最初の勢力は物部氏？一大王のヤマト入り以前から勢力を持つ一族：3世紀前半？
- 息長氏の台頭：3世紀後半？
- 葛城氏の台頭（朝鮮出兵）と勢力拡大—応神天皇以降：4世紀後半から（河内王朝＊）
- 物部氏の復活、葛城氏の没落—雄略天皇によるクーデター：5世紀後半
- 大伴氏の台頭と没落—朝鮮半島の外交を巡る大伴金村の失政—蘇我稻目（蘇我高麗の長子）の台頭：6世紀初頭（欽明時代）
- 6世紀中頃：蘇我氏と物部氏の仏教伝来を巡る抗争
蘇我馬子vs物部守屋/中臣連合→蘇我氏の勝利、以降蘇我氏の繁栄（持統天皇に至るまで外戚関係を結ぶ）と驕り（斑鳩宮、山背大兄皇子の襲撃：蘇我入鹿）→乙巳の変で没落
- 乙巳の変で中臣鎌足が台頭→以降の藤原一族へ：藤原不比等

* 崇神王朝を倒して新たに立てられた王朝という学説で水野祐が唱えた。3王朝説の一つだが、最近では支持されていない。

（注）一族から大臣、大連を輩出した豪族は他にもあり、それぞれ抗争を経験しているが、主な事件を取り上げた。

紀元前～1世紀頃？

海人族

安曇氏

宗像氏

百済

新羅

鉄

リマン海流

対馬海流

沖津宮

出雲（投馬国？）

息長氏

和多都美神社

吉備（投馬国？）

ヤマト
政権

原の辻

中津宮

2世紀～4世紀

志賀海神社

宗像大社



海人族

倭国の朝鮮半島との外交関係

- ヤマト王権：百済勢力
- 日本海側（山陰地方、北陸）豪族：新羅勢力



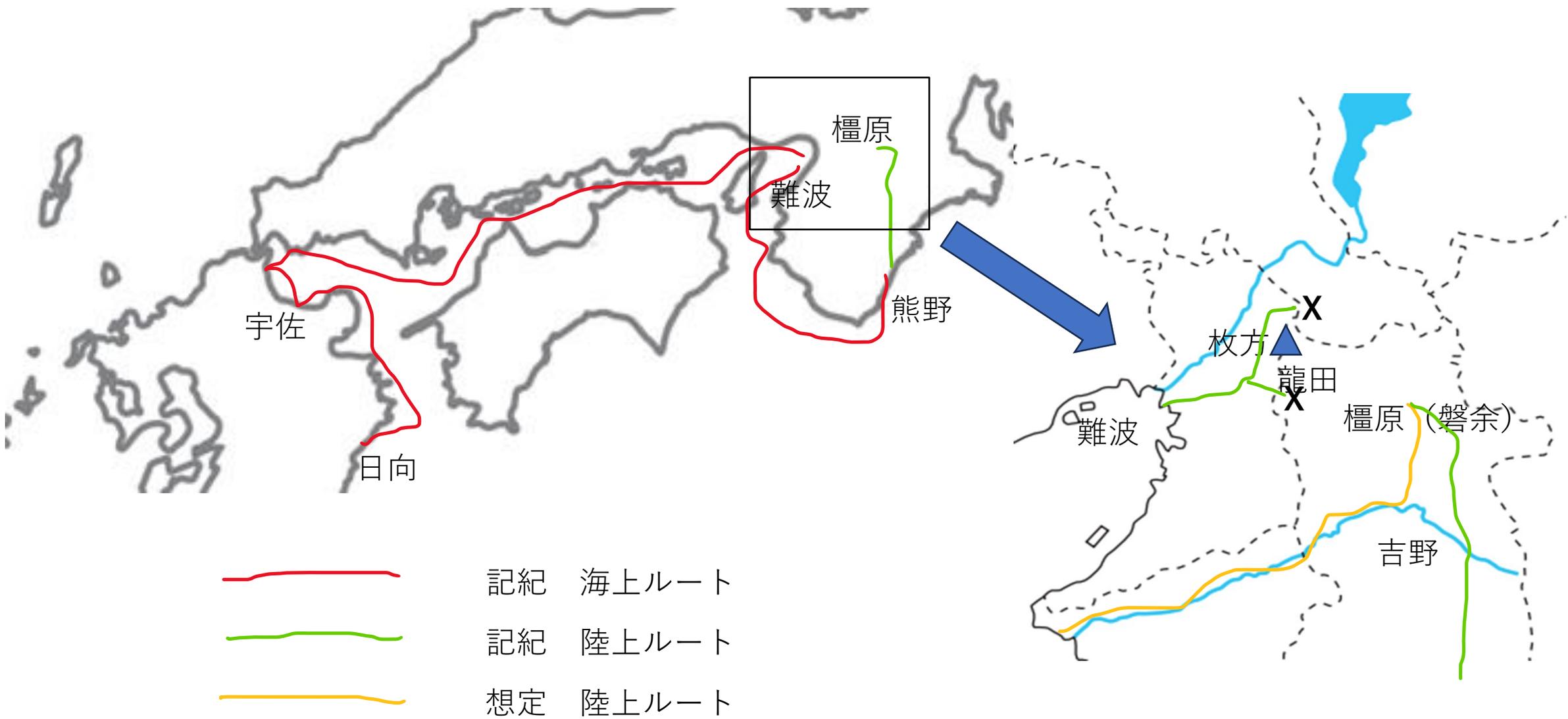
朝鮮半島との交易、運輸の担い手が海人族：玄界灘の航海術

- 安曇氏：ワタツミ三神

志賀島拠点→対馬  ヤマト政権と近い（神功皇后）住吉神社
日本海を北上し、若狭、能登に至る。糸魚川上陸→諏訪大社

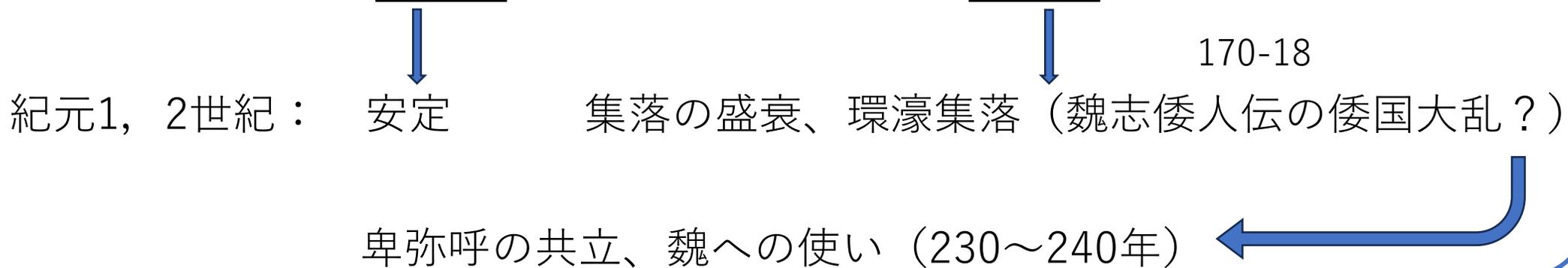
- 宗像氏：天照大神（の流れ）
宗像神社、宗像三神

神武天皇 東征ルート



鉄の伝播（鉄の道）（1）

- 紀元前3世紀：考古学上日本で確認された最初の鉄器（朝鮮半島⇒北九州）
- 紀元前1世紀ごろ北九州に流布⇒紀元1世紀ごろ西日本に伝播



鉄斧（てつび）
・鉄塊を
鍛冶屋
＝
鍛冶屋
＝
鍛冶屋
＝
鍛冶屋

日本での製鉄が始まったのは6世紀頃と言われている

2～3世紀

“鉄資源と鑄造設備、技術者の確保”が権力者の要因と推定



これを確保した人物が王権



ヤマト王権？：3世紀中頃

鉄の伝播（鉄の道）（2）

鉄の生産はどういう仕組みか？

1. 業務分担

- ・原料（鉄斧）買付け：交易財（この場合には輸出品）の確保と交渉@韓国（弁韓）
- ・輸送
- ・鑄造技術と施設
- ・製品販売：交易財との交換交渉



2. 交易財

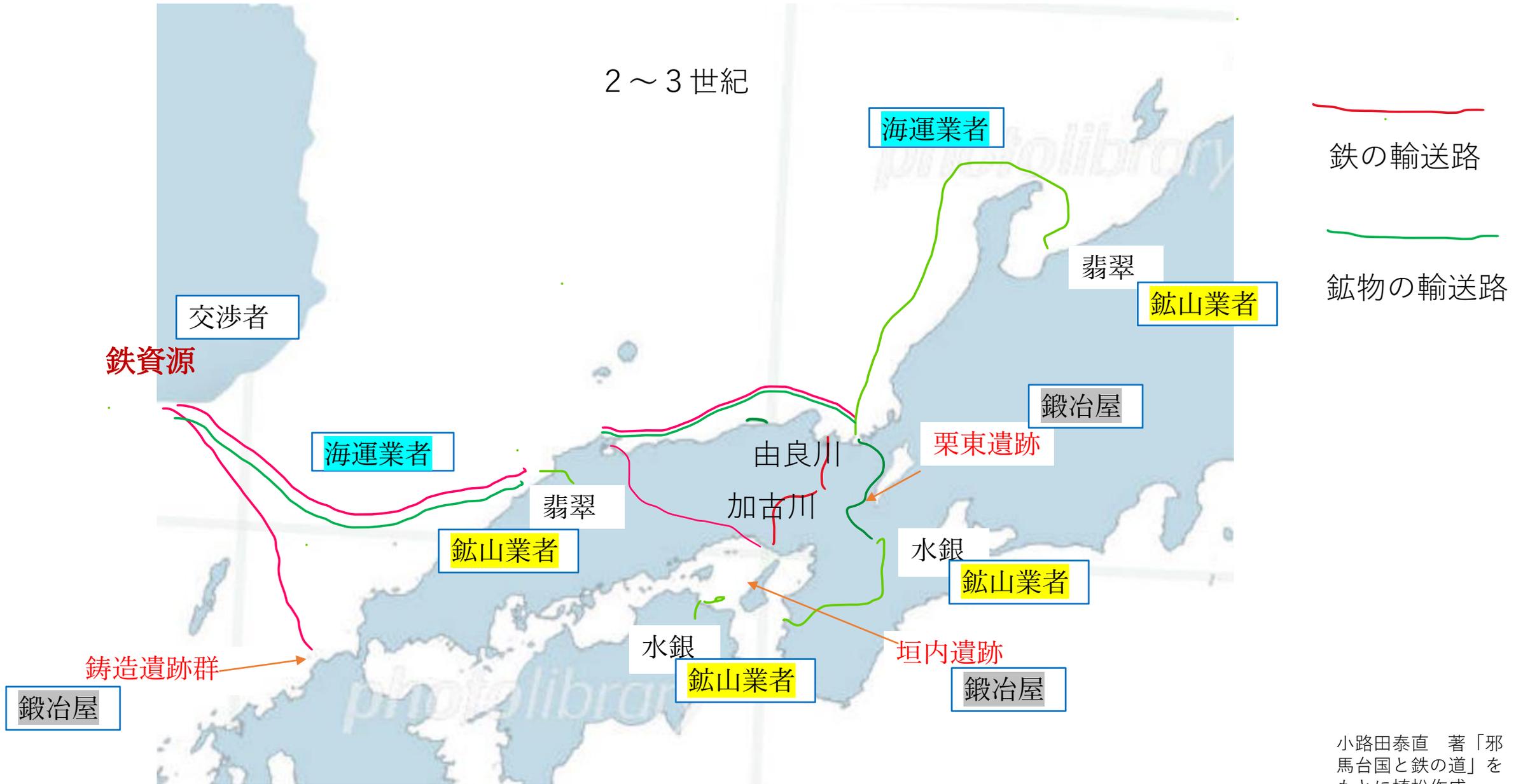
- ・ヒスイ：北陸、出雲
- ・辰砂シンシャ*（水銀朱：丹）：阿波、大和、伊勢

* 卑弥呼からの朝貢物、魏志倭人伝に
「その山に丹あり」

3. 従事者

- ・交渉：渡来人
- ・輸送：海人族
- ・鑄造技術：渡来人
- ・交易財の確保：鉱山業者

2～3世紀



小路田泰直 著「邪馬台国と鉄の道」を
もとに植松作成

神武東遷ルート：辰砂を確保する道（1）

辰砂産地

- 大和水銀（大宇陀）
- 丹生水銀（伊勢）
- 阿波水銀（加茂宮ノ前遺跡）2, 3世紀まで

神武（と称される）集団は

- 阿波で水銀を採掘し、鉄素材を入手
- 淡路島（垣内遺跡*）にて鍛冶
* 西暦100年～220年頃まで
- 鉄を畿内に販売
- 阿波水銀が枯渇→大和水銀を制圧
- 大和盆地に入植し、覇権を唱える
（2, 3世紀?）

上垣外憲一 説

中央構造線



松田壽男 昭和40年頃に提唱

神武東遷ルート：辰砂を確保する道（2）

- 記紀の神武東遷
神武の大宇陀での戦い（エウカシ、オトウカシ、茅原（血原））
- 日本武尊の東征
土蜘蛛：王権に恭順しない地方勢力の総称だが、これは朱を探す遠征ではなかったか？



蒲池明弘 “邪馬台国は「朱の王国だった」”文春新書

- 記紀の記載「（軍団は）山を穿ち、草を払う」は鉾脈を探ることであろう。
- 鉾脈が土蜘蛛の隈取りに転化？
- 土蜘蛛は鉾山作業の譬え？ 葛城「一言主神社」歌舞伎



神武東遷ルート：鉄の道

神武（と称される）集団は製鉄技術を持っていた？

浅井壮一郎 説 古代製鉄物語（葦原中津国の謎）

- 沼鉄鉱（水酸化鉄）：水中に沈殿した鉄分から**製鉄**
- 川の下流、葦の生えている水域 — 泉佐野、三輪？
- 半島からの鉄素材の入手困難（公孫氏の滅亡）
- 神武集団は製鉄技術を持っていた？ = 強力な軍事力：淡路島から大和盆地進出？



上垣外憲一 説 古代日本四世紀の謎

- 神武天皇の幼名：狭野尊（**サノノミコト**）
- 皇后：ホトタタライスズ姫（ホト・蹈鞴・五十鈴）三島溝咋*（茨木市）の孫娘
- 纏向川下流に茅原（ちはら）という地名。
- 淡路島から？

* 製鉄技術者？

これからの遺跡発見次第。富雄丸山古墳：蛇行剣（但し、古墳建造は4世紀後半か？）

崇神天皇

- 諱：ミマキイリヒコイニエ
- 諡号：ハツクニシラススメラミコ
- 258年崩御（古事記の干支より推定）
- 纏向遺跡近くに崇神天皇陵（江戸時代比定）
- 日本書紀に詳述：

- ①大物主神と天照大神の分離 → 檜原神社 → 伊勢神宮
- ②三輪神社の祭祀方法の変更 ヤマトトトヒモモソ姫（卑弥呼？）
- ③四街道将軍を派遣



三輪山、大神神社

- 三輪信仰： 三輪山は大物主神が主で山そのものが神。国つ神。
- 祭祀については、緒論あり。

① 「君」を持つヤマト豪族は三輪君のみ。大王家と並ぶ勢力を有していた三輪氏を大王家に取り込んだ。（岡田精司 説）

② 三輪山の元の名前は「御諸山」で、大王家が祭祀を行っていたが、6世紀に三輪氏に祭祀を委ねた。

それ以降「三輪山」と呼ぶ。（松倉文比古 説）

③ 河内王朝説（直木孝次郎 説）：

河内に在する大田田根子が河内王朝とともに、ヤマト王権を征服したときに、祭祀権も移った。



6世紀頃には、祭祀を官僚機構（三輪氏）に移しても大丈夫なヤマト王権の基盤が出来た。



万葉集　：　この神酒は　わが神酒ならず　ヤマトなす　大物主の醸しき神酒　幾久　幾久

三輪山と伊勢神宮

崇神時代に疫病：お告げ → 国つ神（三輪の神＝大物主神）と祖神（天照）の分離

- 天照大神を檜原神社（元伊勢）に移し、娘（倭姫）に祭らせる
- やがて、檜原神社から天照を伊勢に移し、社を作る＝伊勢神宮（垂仁紀）

日本書紀：32年の遍歴 = 地域平定に要した歲月？



檜原神社



息長一族

- 天日槍（アメノヒボコ：日本書紀、垂仁紀） 古事記では天之日矛（応神紀）



新羅の皇子（神婚伝説：満州系の神話）。

- ✓ 出雲（播磨？）に入国し、大王の許可を得て丹後、但馬、播磨、若狭を遍歴し、最後円山川を上って、現在の豊岡市に定住。
- ✓ 地元豪族との婚姻。息長水依姫の祖先 → タラシ姫：神功皇后（応神の母）
- ✓ ”中国地方の山地を巡っていた“との記述（風土記）：鉄の鉱脈を探索か？

- 合理的な推測のできる天皇家の祖先か？

松本 昭 “天皇家の祖先・息長水依姫を追って”

応神天皇 (1)

日本書紀の記述：

- ①仲哀天皇 *1 (14代) 52 歳のとき、息長帯比売命 (オキナガタラシヒメ *2) との間に遠征先の九州で誕生。*1 実在しないことが通説。*2 神功皇后：母方は新羅 (天之日矛)：後述
- ②誕生以前に仲哀天皇は突然死去。
- ③成人後、ヤマトに進出し、政権を握り即位。諡号：ホムタワケ
- ④妃は息長氏からと12代景行天皇子孫 (仲姫：仁徳の母親) を娶る

史実は？

- ①4世紀後半、ヤマト政権に混乱。
- ②地方豪族の息長氏が帯比売命を大王 (仲哀と称される人) の後妻に嫁がせ、御所を角鹿 (敦賀) に移す。今の気比神宮。
- ③息長帯比売命は新羅遠征を主張。仲哀天皇と称される大王は反対

————— 暗殺

では、応神の父親は誰か？暗殺の黒幕は？

武内宿禰

葛城襲津彦 (ソツヒコ)



応神天皇 (2)

葛城襲津彦 (葛城氏) について

- 5世紀最大勢力の豪族。襲津彦 (4世紀末) の実在については諸説あり。
もともと葛城氏は銅鋳主？
- 自身は大和川、紀ノ川を勢力下。息長氏*と連携し、淀川、木津川水系 (琵琶湖) を通して日本海側を勢力下 \longleftrightarrow 旧ヤマト勢力 (盆地東部) と対立
 - * 琵琶湖沿岸を勢力下。天之日矛伝承。水依比売命 (ミズヨリヒメ) は近江富士の巫女。新羅系？
- 朝鮮半島利権：鉄資源の確保。遠征後 (高句麗に大敗)
5世紀前半に、新羅から多くの技術、人質を持ち帰る
- 外戚を通して王権を支配：襲津彦の娘 (磐之姫) が仁徳の妃 (恐妻家) 以降、外戚関係を強化。
- 21代雄略天皇が本家が滅ぼす。 \longrightarrow 権力基盤は物部氏に
- 分家は残り、蘇我氏へとつづく



一言主神社の雄略天皇像

宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題

松田寿男

- 内容
- 一 宇陀の入谷
 - 二 血脈の伝説
 - 三 二つの丹生神社
 - 四 水女神の問題
 - 五 宇陀の水女神社
 - 六 式内社の変遷
 - 七 養父彦伝説
 - 八 丹生川上神社
 - 九 丹生神社と丹生川上神社
 - 一〇 丹生川上神社の社定
 - むすび

大和の奥地を歩く機会に、私はたびたび恵まれているが、そのたびごとに記紀の伝説が批判精神の欠如と科学の裏付けがないままに曲解され、あるいは誤解されているのではない

一 宇陀の入谷

まず宇陀の奥に入谷（にうだに）という部落があつて、そこに丹生神社が残っていることから筆を起すことにする。近畿日本鉄道藤原駅の南八キロ、奈良県宇陀郡菟田野町字大沢に大和水銀鉱業所が栄えている。これは北海道のイトム

かという疑いを深めた。とくに奥宇陀の山々から深い谷を刻んで流れる水が、野におりようとするあたりにひろがる丘陵地帯が、いままで歴史学からも考古学からもほとんど開拓されていないにも拘わらず、意外にも古代史上に重大な役割を担っているのに注意された。幸にも早稲田大学の矢嶋澄策理字博士および大和水銀鉱業所の井上純一所長の支援を得て、現地に再三の科学的調査を行うことができたので、その際の成果を裏付けとして私の意見を簡単に書きつつおきたい。試料の採取と分析に絶大な協力をおしめなかつた前記の両鉱床学者に厚い感謝の意を表する。

次に次ぐ日本第二位の水銀鉱山であつて、本州で稼行されている水銀鉱山としては現在唯一のものといつてよい。この大和水銀鉱業所から東北に山合いをたどると、大神という注目すべき部落（後述）を北の山腹に仰ぎつつ、約二キロ半で入

